



死ねない . . .

らられーこ

## 死ねない

<http://p.booklog.jp/book/30274>

著者：らられーこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hirano16/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/30274>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/30274>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

死にたい . . .

誰もいない10階建てのビルの屋上で、

純哉は一人、金網を越えた縁に座り

うつろな目をして下を見ていた。

今、まさに飛び降りようとしている。

躊躇する思いよりも、絶望感の方がまさっているので

思いとどめるものは、何もない。

「死にたい・・・」

そうつぶやいた瞬間、

純哉は、地上へと落ちていった・・・。

ビルの屋上には誰もいなくなり、

何事もなかったかのような静かさだけが残り

同時に地上は修羅場と化していた。

ピ～ポ～ ピ～ポ～

サイレンの音が鳴り響いてから、

どのくらい時間が過ぎたのだろう

純哉は病院のベッドで目を覚ました。

ただ過ぎていく時間の中で

死ねなかったつらさが、言いようもなく襲ってくる。

ビルから飛び降りた事は、すべて夢だったのかと思うほど

体に痛みも怪我もない。

でも、病室の白い天井と白い壁の無機質さが

今までとは生活を一変させた事を物語っていた。

病室に入って来た看護師は、

「目が覚めたんですね。では、先生を呼んできましょう」

それだけ言って、外へ出て行った。

しばらくすると、先ほどの看護師が医者と一緒にやって来た。

純哉の顔を覗き込んだ医者は

「気分はいかがですか？」

そう尋ねた。

「あっ・・・気分は悪くないです。

それから・・・体も痛くないです・・・」

純也は応えた。

10階から飛び降りたことなど嘘のようなのだ。

「そうですか。では、しばらく休んで、落ち着いたらお帰り下さい」

医者がそれだけ言うと、二人は病室から出ようとした。

「あの・・・すみません」

純也は、医者と看護師を呼び止めた。

「先生・・・ぼくは10階建てのビルの屋上から飛び降りたんですよ」

怪我さえしていない自分の体に疑問をもった純也は、医者に尋ねた。

「そうですね。こんな事あまりやらない方がいいんですけどね」

医者からの返事は呆気なく

そして、それ以上聞く間もなく、出て行ってしまった。

それから、どの位の時間が経っただろう。

純也は数人の看護師に見送られ、退院した。

道をとぼとぼと歩きながらも、再び気持ちは落ち込んでくる。

自分は今まで運が悪かった。

その中でも、自殺に失敗して怪我ひとつない事が一番の不運に思えてくる。

「死にたい・・・」何度かつぶやきながら

行くあてもなく、ただただ歩き続けた。

歩き疲れて空腹を感じた純也は、目に付いたラーメン屋へ入った。

一死にたくてもお腹は空くし、おいしいとも思うのか

そう思っていた時、とんでもない事にも気がついた。

「あの～、すいません・・・ぼくお金持ってなくて」

忙しそうに働いている店の主人に

申し訳なさそうに話しかけると

店の主人は、一瞬手を止めて純哉の顔を見た。

気がつくと、満席の店の客たちもラーメンをすする手を止めて

一斉に純哉を見ている。

「お金なんかいらないよ～。

よろこんでくれればいいんだよ」

店主が笑いながらそう言うと、客たちも笑った。

「ごちそうさま」

純哉はそれだけ言って、店を出た。

一変な店だ。まあ、死ぬ直前にご馳走してもらった事は、感謝するか。

そう思ったが、病院の事を思い出し、また憂鬱になってきた。

一病院のお金も払ってないや。

ラーメンはただでも、これから数万円・・・

いや数十万のお金を請求されるかもしれない。

神様はどこまでおれを追い込むんだか。

でも、関係ないさ。

その頃には死んでるし。

そう考えながら歩いて、赤信号で止まった時だった。

「あゆみ～、久しぶり！ 今何やってるの？」

「あっ優子！ 久しぶり。私ね、今モデルやってるの。

とっても楽しいんだから～」

「へえ～。おもしろそう！ 私はね、今大学で猛勉強中なの。

なんか思いっきり勉強したくなっちゃったんだ〜」

「そう言えば、ゆりは仕事で海外行くって言ってた。

何の仕事かわからないけど、海外行く仕事が

したかったんだって」

「わ〜！ それいいかも！」

純哉は明るくはしゃぐ女たちに、露骨に嫌な顔をした。

早く青信号になってほしかった。

女たちの会話が騒がしく続いていたので、青信号になると同時に

その場から逃げるように離れた。

一チツ 勉強したくたって、仕事したくたって

できない奴はたくさんいるんだ。

また、言いようのない絶望感が込み上げてきた。

「今度はちゃんと死ねるよう、もっと高いビルを探そう」

声に出して、自分に言い聞かせた。

たまたま近くにあったマンションは15階建て。

吸い込まれるようにこのマンションへ入って行った。

オートロックだが、誰かと一緒に入れば問題はない。

エレベーターに乗り、すぐに最上階へ到着した。

「この前よりも高いビルだ。

ここなら大丈夫！」

そう呟いた純哉は、笑みさえ浮かべていた。

下を見下ろし、障害物がない事も確認した。

そしてそこから、躊躇なく飛び降りた。

エレベーターを降りてから、ほんのわずかな時間だった。

ピ～ポ～ ピ～ポ～

サイレンの音が鳴り響いてから、どの位時間が過ぎただろう

純哉は再びベッドの上で目を覚ました。

前回とまったく同じ光景だ。

ただ過ぎていく時間の中で

死ねないつらさが、言いようもなく襲ってくる。

—自分は本当にビルから飛び降りたのだろうか・・・

なぜ、体に痛みもキズもないのだろうか・・・

病室の白い天井と白い壁だけが、

ビルから飛び降りる前の世界と変わっただけだ。

病室に入って来た看護師は

「目が覚めたんですね。では、先生を呼んでみましょう」

それだけ言って外へ出て行った。

しばらくすると、先ほどの看護師が医者と一緒にやって来た。

純哉の顔を覗き込んだ医者は

「気分はいかがですか？」

そう尋ねた。

「気分は悪くないです。」

それから前みたいに・・・

どこも痛くない・・・」

二回も起こった奇跡に、純哉は納得できなかったが

医者と看護師は、冷静だ。

「では、しばらく休んで、落ち着いたらお帰りください」

医者の一語を残して、二人は病室を出て行った。

—おかしい・・・

あきらかにおかしい。

なぜ死ねないのだろう？

純哉は疑問に思ったが、医者や看護師には尋ねなかった。

一刻も早く、この病院から逃げなければならない。

純哉には、わずかな金額でも支払能力はないのだ。

—自殺に失敗して、借金作って

返済のために生きるなんて

まっぴらだ。

純哉は誰にも知られず、病院から抜け出す事に成功した。

しぜんと笑いが込み上げてくる。

—おれもちょっとは運がいいかもしれない・・・。

だから、今度は大丈夫。

運がいいんだから。

しばらく歩いていると、踏み切りがあった。

カン カン カン カン

もうすぐ電車がやってくる。

考える時間がないほどにわずかな間に

体が勝手に動いてしまったかのように、

電車に飛び込んでいた。

ピ～ポ～ ピ～ポ～

サイレンの音が鳴り響いてから、どの位の時間が過ぎたのだろう。

再び純哉は、病院のベッドで目を覚ました。

—おれはいったいどうしたんだ！

どうなっているんだ！

なぜ、死ねないんだ・・・

生きるという事なのか？

いや、怪我もしていないのは

やっぱりおかしい。

看護師が病室に入って来て

「目が覚めたんですね。では、先生を呼んできましょう」

また、それだけ言って出て行った。

しばらくすると、先ほどの・・・と言うか、いつもの看護師が

医者と一緒にやって来た。

純哉の顔を覗き込んだ医者もすでに知った顔だ。

「気分はいかがですか？」

前回とまったく同様に、医者に尋ねられた。

「あっ・・・大丈夫です。

それから、いつものように、どこも痛くないです」

「そうですか。では、しばらく休んで、落ち着いたたらお帰り下さい」

二人はすぐに病室を出て行こうとした。

もうすでに見慣れた光景だ。

だが、純哉はここで大声を上げて医者を呼びとめ

疑問をぶつけた。

「先生！どうしてぼくは死ねないんですか？

即死だっておかしくないのに、無傷なんて

どう考えても、変ですよ！

こうして病院に担ぎ込まれているんだから

死のうとした事は事実ですよね。

いったいどうなっちゃってるんですか？」

医者と看護師の二人は、顔を見合わせ

医者が話しはじめた

「やはり気づいていなかったのですね・・・。

では、お話をさせていただきます。

実はあなたの願いは叶っているんです」

純哉には、まったく意味がわからない。

医者は続けた

「一度目にこちらへ運ばれた時には、すでに死んでいたのです。

ここは天国なんです。天国は死ぬ時に願った事が叶う世界です。

あなたの死にたいという思いは、叶えられ続けているんですよ。」

何も答えず、医者顔を見つめている純哉に

優しい口調で、また続けた。

「私は死ぬまで医者になりたかったと、ずっと思い続けていました。

だから、死んで医者になれたんです」

看護師も続けた

「私は12歳で死にました。最期まで一緒にいてくれた看護師さんが

とても優しく大好きでした。だから、私は今度生まれ変わったら

元気な体で生まれたい。そして、看護師さんになりたいと思ったんです。

死んで実現すると思いませんでしたけど」

医者が再び付け加えるように、話した。

「かわいそうですが、自殺者は死ぬ時に死にたいと願った。

だから、こちらの世界でも死に続けるんです。

願いが叶ったという事なんです。

飛行機から飛び降りても・・・また次の死に場所を探す。

病院はそんな人たちで溢れかえっています。

ひと時の休憩場所です」

純哉は、ずっと黙っていた。

言葉も感情もなかった。

あれほど死を望んでいたのに、死んでいる事に茫然とするだけだった。

願いが叶うという事は、うれしい事だと思っていたが

まったく心は満たされていない。

優しく見ていてくれる二人に、やっとの思いで尋ねた

「ぼくは、いつまで死に続けるんですか？」

「その判断は、医者ではありません。

自殺してこちらに来た人が、生まれ変わってまた生を受けた時

何があっても生きようとする心を持つまで。

そんな話を聞いた事があります。

だから、その判断ができるのは、あなたを見守っている神様です。」

「・・・」

純哉に言葉はなかった。

聞いているのか、聞いていないのかさえわからない。

「病院は、あなたを何度でも受け入れますよ。

そしてお金の心配もいらない。

ここは天国ですから」

そう話す医者と看護師の顔は、優しくかった。

「ぼくは、死んでつらい天国にいるのか」

純哉は小声でつぶやいた。

「天国は願いが叶い、そこから成長していける世界です。

でも、成長するのは自分自身が悟った分だけ。

つらいと思ってしまうあなたの心を鍛えられるのは

あなただけなんです。そこには神様も介入できません。

「だけど、あなたの心の成長を、神様は願っていますよ」

医者が話している言葉は、純哉にはまったく伝わらない。

純哉は力なく立ち上がった。

医者と看護師が駆け寄って来て、純哉を支えようとした。

純哉はそれをスルリとかわし、病室の窓から飛び降りた。

激痛を感じたが、すぐに治まった。

ただ、起き上がる気力がない。

病室にいた医者と看護師が駆け付けた。

二人に抱きかかえながら、純哉はかろうじて立ち上がる事ができた。

「さあ、病室へ戻ってしばらく休みましょう」

医者からそう言われた純哉は、促されるままに病室へ戻り、

ベッドに横になった。

「あなたは、願いが叶う天国にいる事を忘れないでくださいね。

「気の持ち方で幸せになれる所なんですよ」

医者と看護師は、純哉の手を握りしめ、病室を出て行った。

純哉は病室に一人になり、しばらく両手で顔を覆い、じっとしていた。

どの位時間が過ぎていったらう。

純哉は真っ白な天井をうつろな目でみつめながら、こうつぶやいた。

「死にたい！」